「憑神さまは突然に！」

～晴天の霹靂６００日の憶え書き～

南部昌弘

災難はある日突然やって来た。しかも連続でやってきた。
これは２０１５年の年末から２０１７年７月までの２０か月の間にわが身に起った数々の災難記録である。まるで、憑神様が突然ご降臨あそばされたごとくであった。

齢８０近くなって、「そろそろ終活でも」という心構えは「頭の片隅に」芽生えてきてはいたが積極的になにするでもなく、相変わらずゴルフにグルメに飲み会にと安穏な日を送っていた。

憑神その1「胃がん」

２０１５年の暮れ、毎月の血圧降下剤の処方箋をもらいに立ち寄った近所の「主治医」からこう告げられた。「しばらく胃カメラを飲んでいないようだが、そろそろ飲んでみたら？T 医院に紹介状を書いておきましょう」と。（１０数年前胃のポリープを切除して以来毎年胃カメラを飲んでいたが、定年後前述の先生から「胃カメラなど毎年飲まなくてもいいよ」とのありがたいアドバイスを好意的？に解釈してここ５年ばかり放置していました。）

１２月の中旬例年のごとく各種忘年会を６回こなし最後の忘年会を夕方に控え、前述の T 医院で胃カメラを飲みました。麻酔から覚醒するなり「直ぐに奥様を呼んでください」と告げられ、妻が到着するなり「胃ガンです。直ぐ手術が必要です。豊中の緑ヶ丘病院に紹介しますから精密検査を受けてください」と。

動転しながら顧みるに、その夏頃からゴルフで昼食の折、クラブハウスで蕎麦を啜ったり急いで食事をしたときに喉が詰まり、気分が悪くなったりして１０数分休憩したことが数回ありました。

友人が素人考えで「多分逆流性食道炎だろう」というので「そんなもんか」と軽く考えていました。
診断の結果やはり「胃癌」で、場所は胃の吻門部（食道と胃の繋ぎ目）で胃の「全摘」が必要。早い方がいい。年末にしますか？年明けにしますか？」と迫られ、親兄弟、親族に「ガン」はなかった！のに、と思いつつも「動転したり、悲しんだりしている」間もなく年明け早々４日入院、５日手術という運びになりました。

手術は無事成功したようですが、その夜はさすがに眠れませんでした。

見舞いに訪れた友人、知人は異口同音に「元気そうじゃないか！」と言ってくれましたが、それは点滴の栄養剤の効果だけでした。
食事をしても、食欲はまったくなく、３度の食事と３度の間食（ビスケットやカロリーメイト等）もただ与えられたものを口に入れるだけ、の状態でした。はじめてシャワーを浴びて鏡を見て驚愕しました。

顔は皺だらけ、肋骨は浮き、足は細く、腕にも血管が浮き出ていて、まるでアウシュビッツもかくやと思わせる「見るも無残な姿」でした。体重は事前に「１０Ｋｇは痩せる覚悟を」と言われていましたが、全身の筋肉が落ちズボンはガバガバ、お尻の肉など全くなくなり、クッションを敷かぬと痛くてまともに座れません。退院してからは部屋のあちこちにクッション、円座を置きまくる状態でした。

食べるものは「なんでも」「少しずつ」「ゆっくり」「時間をかけて」と指導されましたが、これが「なかなかむずかしい」。胃のない先輩？から食事に２時間掛けると聞きましたが、生来の「早食い」には「とてもとても」。これが次の災難の「腸閉塞」の遠因でもありましょう。

筋肉がなくなると、呂律は回らず、歩行はよちよち歩き、どういうわけか歌が唄えません。

筋力トレーニングをと腕立て伏せをしようとしてもその体勢すらできない有様。愕然としました。

それでも抗がん剤を４週間飲み２週間休みのサイクルを一年間続けることになり、それなりに安定した日々を送り始めていました。

６月には気分転換にと円座持参で２泊３日で鳴子温泉にも旅したくらいです。さすがに仙台から鳴子温泉までの１時間のバス旅は堪えました。当人は勿論ですが介護の妻のストレス解消に少しは役立ったようです。

憑神その2「腸閉塞」

７月に入り、下痢、便秘、腹痛に時折襲われたりしながらも、抗がん剤の副作用だろうと大して気にせず、そのたびに近隣の医者に駆け込んだりして対処していましたが、７月末に突然激しい腹痛に襲われ辛抱しきれず救急車のお世話になりました。しかし当日専門医が不在で「腸が動いているから大したことないだろう」とその日は薬をもらって帰えされましたが、その夜も痛みが治まらず翌日再度救急病院にお世話になるはめになりました。今回は「腸閉塞即手術！」と診断され緊急手術です。手術は５～６年前軽い脳梗塞を発症した折、「血をさらさらにする」目的で、その後バイアスピリンを常時服用していた関係等で、「万一の場合」を想定していろいろ念書を書かされました。（勿論当の本人は知りませんでしたが）

手術は腸を６０ｃｍ切って無事成功したそうですが、またまた体重はさらに５Kg も落ち一時は４０Ｋｇを切りました。まさに見る影もない有様です。１年に２度も「切腹！」とはわれながら「ようやるわ～」の心境です。

そこで、以後の食事が重大ですが、退院の折栄養士さんから示されたリストにわが目を疑いました。

食べてはいけないもの、避けたいもののリストは以下です。

油もの、肉類はもちろん刺身などの生魚、イカ、タコ、貝類、海藻（海苔も）、生野菜、納豆、繊維の多いひじきやサツマイモ、コンニャク、レンコンやバナナ、も、さらにラーメン、蕎麦も。消化の良いとさるお餅もだめ（口の中で砕けずそのまま腸に入るので詰まる原因になるからだそうで、正月には雑煮の中にどろどろに溶けたお餅を少しいただきました）。

これでは「美味しいもの、好きな食べ物」は全てダメで、大根やカボチャの煮物や卵料理や豆腐料理くらいしか食べるものはありません。もちろん手術直後だけにことさらに厳しく指導されたのでしょうが。
以後自分の「お腹と相談」しながら徐々に少量づつ食べ始めてはいましたが。

憑神その3「骨折」

年が明けて抗がん剤の服用がなくなり、体重も徐々に５Kg ほど回復しリハビリ用マシーンでのトレーニング、毎日の散歩、自己流の体操、ストレッチなど続けながら徐々に体力に自信を覚え、それまで一滴も飲まなかったアルコールも、ゆっくり食べる目的もあり夕食時に「水割り純米酒」をチビチビやり始めていました（腸はアルコールの吸収がよいため少量ですぐ酔います。飲みたくても飲めません）

時には大して食べれず、飲めもせずですが、友人たちとの歓談がしたくて近隣での「飲み会」「駄弁ろう会」にも参加したりしていました。

その日もいつもの通り早朝散歩に出かけましたが、なんの変哲もない橋の上で突然なにかに躓いたか転倒し、右膝を激しく打撲し動けなくなりました。すぐさま妻に迎えを要請し整形外科に担ぎ込んでもらいました。元来バランス感覚が良い方で転んだことはほとんどなく、躓いても必ず送り足ができ、自分は年取っても「絶対転倒

などしない」という変な過信を持っており、しかも後で確認しても躓くような段差もないところで「転んだので」、いまだにまるで狐につままれたような気持ちです。医者に話すと突然血糖値が低下し一瞬気を失ったのでは？との見解もあり、一応の納得したものの、それはそれで心配の種ではありました。

レントゲンの結果「膝の半月板骨折」と診断され、ギブスに松葉杖の生活を余儀なくされました。処置が終わると大した痛みもなく、以後の生活を映画「裏窓」の J.スチュアートをイメージしたりしていました。

生まれて初めてのギブス生活は想像以上でした。椅子に座っても足の角度を決めるのが難しく、いろんな段ボールで調節してみましたが最適なものは結局見つからず長時間同じ姿勢がとれません。松葉杖生活も想像以上に堪えました。家の中での立居振舞が非自由なことは当然ですが、両手が塞がり少し重いもの、大きいものが持てません、掃除機一つ掛けられません。もちろん右足が使えないため車の運転もできません。右足が固定され階段の上り降りに難渋します。夜中のトイレのため２階の寝室は使えず、階下に布団を敷き寝起きしました。トイレも便座の中央に座れず、便はあちこちに散り、洗浄にもピンポイントに当てるのに苦労します。浴槽に浸かれないので風呂には入れず、ギブスを濡らさないためシャワーの度にビニールやタオルでギブスを巻いたりしなくてはならず、おまけにパンツの脱ぎ着にもままならずで「幼児に帰り」、妻におんぶに抱っこの生活でした。この頃は何かにつけ、「神さま、嫁（カミ）さん仏さま」の有様でますます妻には頭があがりません。

車椅子も初めて経験しました。舗装道は雨水の排水のためか、どこも少し傾いており直進するにも苦労しました。街へ出かけた折にはホテル、スーパー、病院、図書館等公共施設にはどこでも車椅子が常備されていて、手軽に借りられるので安心でしたが、中には「あるにはあるが」空気が入っていないものや、足置きが破損しているものもあり、「メンテなくして存在なし」と痛感しました。

それでも少し慣れてくるとあちこち出かけました。ある日妻の運転で高速道路の P.A のドライブインから車に帰ろうと小さな階段でもたもたしていたところ、突然見知らぬ人が後ろから「どうぞ！」と言って肘を支えて助けていただいたときは感激でした。まさに「傷害者の方々に対する接し方はこうあるべきだ！」との実感です。

またある時骨折の前ですが、昨年は入院等で桜が見られず、今年こそはと！との思いで少し「膝の悪い」妻と花見見物がてら「花のお江戸」にとシャレて見ました。隅田川、千鳥ヶ淵の桜は誠に見事なもので堪能しましたが、JR,地下鉄にかかわらずエレベータはどこもホームも端の不便なところにしかなく、あちこち階段には苦労しました。エスカレータなどなにもない駅も数か所あり、まだまだオリンピックを控え「傷害者にやさしい街」には「程遠い」との感を深くいたしました。特に地下鉄の駅は地下深くあり、エスカレータは「あるにはある」が、特に丁度お花見どきで人ごみが半端でなく、「どこが入口」か分からず、妻が泣く泣く人に押されながら長い階段を一段づつ降りたのはまさに悲劇でした。

「２０２０」どうなることか？

憑神その4「大火傷」

４週間のギブス生活に別れを告げ、なんとか両足で歩けるようになりリハビリ中の時でした。

食事時に座椅子に座りポットから急須にお湯を注ごうとしてテーブルに急須をぶつけ右ひざに熱湯をぶちまけてしまいました。

幸い庭にアロエを植えていたので早速その肉を切り取りラップと包帯をぐるぐる巻きにして対処しまし

た。なんのことないまた「包帯のギブスの不自由生活」に逆戻りです。なんで右膝ばかり・・と一時は恨めしく思ったことでした。
　アロエのおかげで今では傷跡もきれいに治りました。まさにアロエさまさまです。
今から思えばもしギブスしているとき、ギブスに熱湯を浴びればあのような急な処置もできなく、整形外科に駆け込むのも時間がかかり事後の処置がさらに大ごとだったとろうと推察できます。
　そういえば、骨折したのも５月という暑くも寒くもない「爽やかな」季節で大した汗もかかず、暖房することもなく、色んな処置をするにも自分も介護者にも負担が軽かったと思われ実にラッキーでした。
　また手術の後は「旨いもの」は食えず、「大酒」も飲めず、で血糖値、血圧も正常値に戻り生活習慣病もなくなりました。世の中悪いことばかりではありません。
　そういう意味でもまだまだ「ツキ」が残っているのかもしれません。
現在杖も持たず、両足で歩けるようになりましたが、まだまだ「速足」「小走り」はできません。街では信号、横断歩道等は「交通ルールに厳格」に、階段は「手摺の横！」を心掛けています。
　よく考えると「そんなに急いで何処え行く～」を肝に銘じるべき「歳」でしょう！

　以上の数々の経験も、来年「傘寿」を迎えるにあたっての「生き方」を示唆された、「憑神」ではなく「天啓」を受けた？と思うべきだったのでしょう。

２０１７年８月　能登にて